



東小だより

学校だより 9月号

令和7年9月1日

昭島市立東小学校

校長 鈴木 正樹

目標に向かって進む

校長 鈴木 正樹

学校中に子供たちの声が響き渡り、学校に活気が戻ってきました。報道では、全国各地で猛暑や豪雨の影響による災害や事故、事件等が毎日のように報じられていましたが、子供たちは安全に健康な生活を送ることができたのでしょうか。今年度の夏休みは、史上最長最多の猛暑日を記録するなど屋外での活動が厳しく制限される中ではありましたが、子供たちは、夏休みにしか経験できないような様々な貴重な体験ができたのではないのでしょうか。

2学期は、学校・学年での大きな行事が続きます。子供たちは、これらの行事での多くの体験を通じて様々な力を身に付けて成長していきます。

「志定まれば、気盛んなり」これは江戸時代末期の長州藩士、吉田松陰が残した言葉です。志とは、心に決めた目標に向けて進もうとする気持ち、決心のことです。したがって、この言葉の意味は、目標への気持ちが志としてはっきりすれば、自ずとやる気や意欲が生じるということです。さらに松陰は、目標を決めるだけでは十分ではない、なぜその目標を定めるのか、その目標を達成する意味は何かと、目標への意味を自分で明らかにしたり、価値あることだろうかと自分でしっかり考えたりすることが大切だと考えていました。松陰は松下村塾において、独自の学習方法を生み出しました。それは「抄録」という方法で主体的な学びを塾生たちにさせていました。具体的には、学ぶ若者の年齢に合わせて1冊の本を与える。その本を読んで、感銘したり共感したりした文章を自分で選んで付箋を貼る。次に自分で選んだ文章を、なぜこの文章にひかれたのかよく考えて、その文章をそっくり写す。そして書き出した文章をもう一度読んでから考える。1冊終わると松陰は、また新しい本を1冊与えて「抄録」を繰り返させました。何か素晴らしい考えを教えられたのではなく、自分自身で読書をし、なるほどと思うところを見付ける。この抄録という方法では、自分の感じたことや考えたことがより深められていくのです。明治の近代国家を切り拓いた若者たちは、自主的に考える抄録という読書方法により、読んだ人の本当の考えを主体的に自分の考えに深めていったと思われます。さらにその考えを目標に昇華し、生きていくための「志」が生まれ、身に付いた考えになったと言えます。「志」としての気持ちを高め、気持ちを盛んにして生きていったのでしょう。

自分の目標に向かって主体的に取り組んでいくことが、これからの変化の大きい時代においても大切になってくると言えます。2学期は、「運動会」、「学習発表会」と大きな学校行事が続きます。これらの体験の機会は子供たちがより成長するための貴重な時間となります。行事の際にも目標をもって主体的に取り組んで力を発揮してほしいと思います。まだまだ暑い日が続く熱中症等の心配・不安もありますが、対策を十分に講じて安全を第一に考え、子供たちの成長に向けて学校全体で指導・支援を充実させていきます。御理解と御協力をお願いいたします。